

『マビノーギ』研究(8)

——「スイッツとセヴェレスの物語」をめぐって——⁽¹⁾

中 野 節 子

「スイッツとセヴェレスの物語」(‘Cyfranc Lludd a Llefelys’)は、ウェールズ中世散文物語集『マビノーギ』(Y Mabinogi)の第二グループ、「ウェールズの四つの民話」に属する物語である。四つの民話の中でも、最も短い物語ではあるが、「マクセン・ウレデクの夢」(‘Breuddwyd Macsen Wledig’)と並んで、それぞれローマの占領下であり、ノルマンの影響が未だ及ばなかった頃のウェールズの土着文化の模様を伝える民話であると考えられている。

『ケルゲストの赤い本』(Llyfr Coch Hergest) (c.1300-25)が、この物語の全貌を伝える、唯一のテキストである。『マビノーギ』の現存するもう一つの写本、『レゼルフの白い本』(Llyfr Gwyn Rhydderch) (c.1375-1425)には、物語の始まりの部分の断片が、僅かに残っているのみだからである。

物語自体、他の『マビノーギ』収録の物語群とは異なった、いくつかの特徴を持っていることが分かる。その成立年代は定かではないが、かなり古い言い伝えに基づくものと推定される。圧倒的な人気を誇った、ノルマン系フランスのロマンスものの影響を受けることなく、ウェールズ独自の発達を遂げた物語とみなされており、内容も極めて簡単で分かりやすい。物語の語り手の最大の関心は、ウェールズ中世の聞き手たちの心をとらえていた魔法の出来事を、彼らのよく知っていた人々や、お馴染みの土地との関連の中に、いかに興味深く語

って聴かせるかということにあったと考えられる。物語の最大のテーマであるブリテンの地に降りかかった災難―外国からの進入者の脅威、五月祭の宵に起こる叫び声、際限なく物を入れ込む大籠―にまつわるエピソード等は、初期のウェールズの文学においても、度々登場してくる難題の一つである。

主人公の二人の兄弟のうち、兄スイッツの方は、一二世紀の初期にまとめられたと推定されるモンマススのジョフリー (Geoffrey of Monmouth) の『ブリテン諸王の歴史』(Historia Regum Britanniae)の中に、ジュリアス・シーザーがブリテン島にやって来る少し前に、この島を治めていた王の息子として、登場してくる。ジョフリーの記述によると、この王ヘリ (Heli) には三人の息子がおり、その名前を、リド (Lud)、カシベラウヌス (Cassibelannus)、ネンニウス (Nennius) としたこと、長兄のリドが、トリノバントム (Trinovantum) の城壁を再建し、そのために、以後その町が「リドの城」という意味をもつ、カエルリド (Kaerlud) という名前で呼ばれるようになり、やがてカエルリンディン (Kaerlundein) となったこと等が記されているのである。この物語の冒頭に現れるスイッツ (Lludd)、カスワッソン (Casswallawn)、ニィニヤウ (Nynniyaw) という名前は、これらジョフリーのラテン語名の人物の、ウェールズ語読みとみなされている。ヘリが、ヘリ (Beili) となっているのは、編集

者の単なる写し間違いであろう推定される。しかしながら、ジョフリーのラテン語のテキストの中には、四番目の弟セヴェリスについての言及はなく、彼の創造は、この物語の中でのことである。

彼らの父、マノガン (Manogan) の息子のペリ大王については、九世紀の歴史家ネンニウス (Nennius) が、シーザーの時代のブリトン人の王として、記述している人物である。この物語に留まらず、『タリエシンの書』(Llyfr Tiesin) や「マクセン・ウレデクの夢」にも登場し、特に「マクセンの夢」の物語では、マクセン・ウレデクはこのペリ大王から、ブリテン島を譲り受けることになっているのである。しかし、その存在の真偽のほどは定かではなく、神話的人物として留まっている。

物語の背景となっているのは、ブリテン島のスイツズの領地であり、その中央の地点としてのオックスフォード、二匹の竜を閉じ込めた石の箱を隠したエレリ (Eryri) (現在のスノードン) 等の、具体的な名前があげられている。

I

スイツズとセヴェリスの物語⁽²⁾

マノガンの息子、ペリには三人の息子があつた。スイツズ、カスワツソン、ニイニヤウといった。物語が伝えるところによると、四番目の息子は、セヴェリスであつた。やがてペリが亡くなると、ブリテン島の王国は長男であるスイツズの手に移された。彼はこの王国を上手く治め、ロンドンの城壁を建て直し、沢山の塔を取り囲んだ後、市民たちに命じてその内側に家を建てさせた。その結果、このように立派な家は、王国中のどこにも見られないほどになった。そのうえ、彼は良き戦士であり、寛大で物惜しみせず、食物や飲物を求める人々には誰にでも、ふんだんに恵んでやつたのだつた。沢山の城や町をもっていたにもかかわらず、この町を殊の外気に入って、一年のほとんどを、ここで過ごしていた。そのため、こ

の町は「スイツズの城」(Caer Ludd) と呼ばれるようになり、やがて、最後には「スインデン城」(Caer Lundein) となつた。外国の民がやってくるようになってからは、そこは「スインデン」、または「ルンドリス」(Llundrys) と呼ばれるようになった。スイツズは、兄弟たちの中でもセヴェリスを最も愛していた。というのも、彼が分別のある賢明な男だつたからだ。そして、フランスの王が亡くなり、残された子孫は娘一人で、その領地が彼女の手に譲られたことを聞くと、セヴェリスはスイツズのところにやってくる、彼の意見と助力を求めた。そして、自分の利益というよりは、むしろ一族の名誉と威信と地位とを高めるためにも、フランス王国に自分が出向いてゆき、その娘を妻に求めることをどう思うかと相談した。兄はすぐにその考えに賛成し、セヴェリスは兄の意見を喜んだのだつた。

すぐに支度が整えられ、武装した騎士たちを満載して、船はフランスへと向かつた。その地に着くとすぐに使者たちが遣わされ、フランスの貴族たちに、彼がやってくる理由が告げられた。フランスの貴族と王子たちは相談のうえ、娘をセヴェリスに与えることにし、彼女とともにその国の王冠も彼の手に入ることとなつた。その後彼は、命がつきる日まで、その国をまことに賢明に、分別をもつて、かつ幸せに治めたのだつた。

かなりの時が経つた頃、三つの災難がブリテンに降りかかつてきた。それは今だから、この島の誰もが、見たこともないようなものだった。第一の災難は、この地に入りこんで来た人々で、彼らはコニア人 (Coriand) と呼ばれていた。その知識というのは大変なもので、どんなに声をひそめて話していても、一度風が吹くと、たとえこの島のどこにいようと、その話は彼らに聞かれてしまうのだつた。そのため、誰一人としてこの人達に手向かうことなどできなかったのである。

二番目の災難というのは、ブリテン島のあらゆる炉端で、五月祭の前夜毎にあげられる叫び声であつた。この声は、人々の心臓を引き裂き、男たちは恐怖のために顔色を失い力も萎え、女たちは流産してしまい、若い娘と若者たちは氣もそぞろとなり、動物や木々、大地や川や湖なども全て荒れ果ててしまうほどだつた。

三番目の災難というのは、王の宮廷にどんなに充分な食物の準備がなさ

れていても、たとえそれが一年分の食べ物や飲物であったとしても、全て最初の夜でなくなってしまう、それ以後は何も手に入らないということであった。

第一の災難が、誰にでも分かるはつきりしたものであったのにもかかわらず、他の二つの災難の方は、一向にその訳が分からなかった。そのために、二番目と三番目のものよりも、何とかなりそうに思われたこの一番目の災難から、どうにかして解放されたいだろうかという望みが、大きくなっていたのだった。スイズ王は、ひどく心を痛め心配した。というのは、自分には、このような災難からどうしたら逃れられるのか、皆目分からなかったからだった。そこで王国内の全ての貴族たちを集めて、このような災難にどう対処したらよいかを相談した。貴族たちとの相談の結果、ペリの息子スイズ自身が、フランスの王となっている弟セヴェリスのもとに行き、相談してみることにした。王とその顧問たち以外の人々に、この旅の理由が分からないように、密かに船団の用意がなされた。準備が整うと、自分が選りすぐった者たちと共に、スイズは船に乗り込んで、海を越えてフランスへと向かったのだった。

この知らせが届くと、セヴェリスには兄がなぜ船団と共にやってくるのか、その理由が分からなかった。自分もまた同じぐらいの船団を仕立てて、反対側から迎えに向いて行った。それを見たスイズは、自分の船一隻だけを海に残してもらい、それに乗り込んで、弟に会いに行った。そしてセヴェリスの方も、別の船に乗り込んで兄を迎え、二人は、兄弟らしい愛情をもって互いに抱き合い、再会を喜びあったのだった。

スイズが弟に、自分がやってきた訳を話すと、セヴェリスの方でも、自分には兄がこの地を訪れた理由が分かっていたと言った。そこで二人は、一緒に会合を開き、その用件について話し合った。彼らは、風がその話を伝え、コラニア人の耳に入らないようにと、いろいろと工夫した。セヴェリスは、前もって、ブロンズ製の長い角笛を作っていたので、二人はその角笛を通して話し合うことにした。ところが、こんなふうに、角笛を通して話をする言葉は、全て悪意に満ちた、反対の意味あいを持った言葉として、相手方に届いてしまうのだった。これに気がついたセヴェリスは、悪魔が邪魔をして、角笛の中で悪戯をしていることを知り、ワインを

角笛に注ぎ入って洗ってみると、ワインの効用で、悪魔を流し出してしまいうことができた。二人の話に邪魔が入らなくなると、セヴェリスは兄に、昆虫を何匹か差しあげましようと言った。その昆虫を生かしておいて繁殖させ、次にそのような災難が降りかかってきたときには、この昆虫を潰して、水に混ぜるようと言うのだった。そしてこれこそが、コラニア人をやつつける恰好の方法だと力説した。自分の王国に戻ったらすぐに、人々を全部集めるように、すなわち、自分自身の民も、またコラニア人たちをもみな一堂に集め、両者の間の和平をとりもつふりをして、全員が集まったところで、この魔法の水をとりだし、皆にその水をかけなさいと言った。すると水は、コラニア人だけを殺し、自分の国民は誰一人殺されることもなく、また傷一つ付けられることもないだろうと言うのだった。

「あなたの領地に降りかかった第二番目の災難というのは、一匹の竜なのです。この竜に、別の外国の竜が襲いかかって、やつつけようとしているのです。」とセヴェリスは言った。「そのために、あなたの国の竜が恐ろしい叫び声を上げるのです。あなたはそのことを、次のようにして確かめることが出来るでしょう。国に帰ったら、国土の縦と横の長さを測量させ、中心となるところを正確に見つけて穴を掘り、その穴の中に、出来るだけ上等の蜂蜜酒で一杯にした桶を置き、網でできた布でその桶の上を被うのです。自分自身で見張りをなさっていると、巨大な動物の形をして戦う竜たちの姿が見えるでしょう。けれどそのうち、竜の形をした両者は空中に登ってゆき、最後には、恐ろしく激しい戦いに疲れ果て、二匹の小さな豚の姿になって、網の被い布の上に落ちてくるでしょう。すると、この被い布も彼らと一緒に沈み、桶の底に引っ張り込まれ、彼らはその蜂蜜酒をすっかり飲み干した後、ぐっすり眠ってしまうでしょう。その時、あなたは即座に被い布で彼らを包み込み、石の金庫に入れて、領地の中のもっとも堅固な場所に、地中深く埋めるのです。彼らがその堅固な場所に埋められている限りは、どんなところからも、このブリテン島に、災難がやって来ることはないでしょう。」とセヴェリスは言った。

「第三番目の災難というのは、あなたの肉も飲物も食料も、みんな持って行ってしまいうような、強力な魔力をもった男なのです。彼はその魔法を

使って、全ての人を眠らせてしまうのです。だから、あなたご自身で食料を見張っている必要があります。その男の眠りの魔法が、あなたの身に降りかかってこないように、桶一杯の冷たい水を傍らに用意しておき、眠気が激しく襲ってきたら、その桶の中に入りなさい。」とセヴェリスは言った。

それから、スイッツは自分の国に帰っていった。すぐに、自分の国の人々とコラニア人を一人残さず集めた。セヴェリスに教えられたとおり、昆虫を潰して水に混ぜ、人々に様に振りかけた。するとその場で、コラニア人たちは皆すぐに死んでしまい、ブリトン人の方は、誰一人として傷つく者となかったのだった。

それからしばらくして、スイッツは国土の縦と横の長さとを測らせてみると、オックスフォードの地が、中心の地であることが判明した。そこで、その地の地面に穴を掘らせ、穴の中に、出来うる限り上等の蜂蜜酒で一杯にした桶を置き、絹の布で被いをし、その夜は自分自身で見張りをしていた。そんなふうにして、竜たちが戦うのが見えた。戦いに疲れ果てると、彼らは被い布の上に舞い降り、被いもろとも桶の底に落ちて行った。蜂蜜酒を飲み干してしまおうと、彼らはそこでぐっすり眠り込んでしまった。竜たちが眠っているうちに、スイッツは彼らを被いの布ですっかり包み込んで、石の金庫に入れると、エレリ(Eryri)の最も安全な場所に隠してしまった。その後、この場所は「ディナス・エムレイス」(Dinas Emreis)となったのだが、それ以前は、「ディナス・ファラオン・ダンゼ」(Dinas Faraon Dandde)と呼ばれていた。スイッツは、驚きのあまり心臓を破裂させてしまった、三人の気高い若者の中の一人となった。すると、彼の領地内のあのすさまじい叫び声は止んだのだった。

それがすむと、スイッツ王は、このうえなく大きな宴会の準備をした。用意を整えると、桶一杯の冷たい水を傍らに置き、自分自身で見張りについた。武装を整えて、三度目の夜の見張りについていると、見よ、珍しい余興といろいろな歌が聞こえてきて、激しい眠気が襲ってきた。そこで、自分の計画が妨げられ、眠りに落ち込んでしまわないように、何度も水に入った。すると、見よ、強くて重い武器を身に纏った大男が、大籠を手にやってきて、いかにも手慣れた様子で、食べ物も飲物も、全ての食料をその

大籠に詰め込むと、それを持って逃げて行った。スイッツにとっては、大籠に、そんなに一杯物が詰まってしまうほど、不思議なことはないように思われた。そこで、スイッツ王は、その男の後を追いかけて、こんなふうに声をかけたのだった。

「待て。待て。今までは、おまえは様々な悪事を働いてきたが、私より武術において優れ、勇敢であることを証明しない限り、これ以上悪さを続けさせはしないぞ。」と言った。

すると男は、大籠を地面の上に下ろして、スイッツが近くにやって来るのを待っていた。やがて、両者の間に激しい戦いが始まり、武器からは火花が飛び散った。ついには、スイッツが男を取り押さえ、勝利の女神はスイッツの上に微笑んで、そのあばれ者を自分と地面の間に投げ伏せてしまった。全力を尽くして戦った末、打ち負かされてしまったことが分かると、男は命乞いをするのだった。スイッツ王は、

「どうしておまえを助けてやることができようか。今までさんざん悪事を働き、私に損害を与え続けてきたのだから。」と言った。

「今までおかけした損害は全て償いましょう。そして、これからは、決してこのようなことはいたしません。今後ずっと、あなたに忠誠を誓います。」と男は言った。

そこで王は、男を許してやったのだった。

このようにして、スイッツはブリトン島の三つの災難を取り除いた。それ以後、彼の死の日に至るまで、ベリの息子スイッツは、ブリトン島を豊かに、平和に治めたのだった。

このお話は、「スイッツとセヴェリスの物語」と呼ばれており、これで終わりとなる。

II

この物語の、完全原稿を留める唯一の写本『赤い本』のタイトルは、'Ilyma gyfranc llud a llewelis'となっている。冒頭の'Ilyma' (英語の 'here is' の意味を持つウェールズ語) という言葉が、ウェールズ語特有の緩音現象をおこすために、'gyfranc' となった二番

目の言葉のものと形は、‘cyfranc’であると考えられる。これは、元来「出会い、戦い」を意味する言葉であり、そこからやがて、「物語、冒険」という意味にも使われて行ったようである。

スイッツの治めるブリテンを悩ます、三つの災難の中の第一のものは、コラニア人と呼ばれる外国人の勢力であった。^{〔三題歌〕}（‘Triodd’）に残されている記述によると、ブリテン島に侵入し、力をふるった外国の民としては、彼らの他にもピクト人、サクソン人たちがいたと考えられている。^{〔6〕}

「災難」を表すウェールズ語の ‘gornes’ という言葉は、元来は ‘triniaeth arw’ すなわち「荒い」「荒む」「取扱い」「triniaeth」を表すと考えられている。この物語でも明らかのように、人々の存在を脅かす抑圧者とか侵入者を意味することが多い。後に『マビノギ』に収録された、「エヴラウグの息子ベンドルの物語」（‘Historia Peredur Uab Eirawc’）の中にも、主人公ベンドルによって退治される怪物 ‘addanc’ や、クリスティノール（Cristinobyr）の女皇帝の領地を荒らす、ユニコーンの姿をした怪物を指して使われているのが分かる。ブリテン島の侵入者として、スイッツの時代の人々を悩ませていたコラニア人を表す ‘Coraniad’ という言葉に現れた、‘cor’ は、「小人」を意味するところから、ウェールズの人々が、彼らの存在を脅かす外敵である侵入者を、ときおり現実の世界に介入してきては、悪さをしかける妖精、後の ‘Tylwyth Teg’ と呼ばれる異界の住人などと同様に考えていたことが分かるのである。彼らの最大の武器は、情報を集める特殊な能力にあった。ここでは、それを、どんなに低い声で話しても、すぐさま彼らの耳に入ってしまうと表現しているのみで、一体どのような手段を使って、彼らが人々の話を理解してしまうのかについては、明らかにすることは述べられていない。一旦風が吹くと、どんなところに居ても、話の内容の全てを理解した人物と言ったら、すぐに「四つの物語」中の、「マッスウイの息子マース」（‘Math Uab Mathonwy’）の物語の主人公マースを、思い浮かべる

のではないだろうか。自然現象の一つである風と人間社会を揺るがす情報とは、つねに密接に結びついて現れてくるのが分かる。コラニア人たちの持つこんな能力のため、ブリテン島の住人たちは、しっかりと彼らに掌握されて、手も足もでない状態に甘んじなければならなくなっていたと言う。

この災難を取り除くためにセヴェリスのくれたのは、ある種の昆虫で、それを摩り潰して出来た液体を、彼らの上にかけて殺すという計画であった。それも、コラニア人ばかりでなく、自分の同胞たちも一緒に呼び集めて事をおこない、決して彼らにその計画を悟られないようにと、念を押しているのである。弟セヴェリスの緻密さと抜かりのなさを示す箇所である。

第二の災難は、毎年五月祭の宵に、ブリテン島の各地の炉端で耳にする、恐ろしい叫び声であった。この声を聞いた途端に、男は力を、女は身ももっていた赤ん坊を、そして若者たちは分別を失い、大地の生き物の全てが、不毛になってしまったと言う。結局、その叫び声が、外国の竜とさかんに戦っている一匹の竜によって、あげられていることを教えられる。スイッツは、この竜たちを、蜂蜜酒で酔わせたうえ、石の箱に閉じ込めて、スノードンの山深く埋めてしまったのだ。するとその凄まじい叫び声は、止んだと言う。このスノードンのディナス・エムリス（Dinas Emrys）に幽閉された竜たちのお話は、後述の如く、九世紀の歴史家ネニウスが詳しく記録しているのである。五月祭の宵に、様々な異変が起こるということは、ケルト人の社会に共通した考えであった。とくに異界の住人たちが、公然とこの世界に出没してくる、特別の時間であるとされていたのである。したがって、人々は、彼らの災難を受けないように、いろいろな予防策をこうじたと言われる。J・リース（John Rhye）は、『ケルトの民話』（*Celtic Folklore*）（1901）の中で、この日になると人々がラワンの木で作った十字架を帽子につけたり、家畜の尻尾に結んだりすること、また戸口にはさんざしの花を飾ったりして、妖精たちの侵入を防

ぐ風習があることを記録している。⁽⁴⁾

第三の災難は、スイッツの宮廷で用意された飲物や食べ物への備えが、全で一晩のうちに無くなってしまったことであった。結局その原因が、強力な魔法を操る一人の男が持つ、大籠にあることが判明し、激しい戦いのあと、スイッツは男を降参させ、二度と再びこのようなことをしないように、約束させたのだった。入れても入れても、一杯になることのない袋や入れ物の話は、「四つの物語」の第一話、「ダヴェドの王子プウイス物語」(‘Pwyll Pendefic Dywet’) の中にも登場する。リアンノン(Rhiannon)が、変敵グアウル(Gwawl)を退けるためにプウイスに写えた、あの不思議な袋に、その一例を見ることができるとであろう。

これらの災難の解決にあたっては、いずれの話においても、共通した条件があるのが分かる。それは、他ならぬ当事者自身が乗り出して、事の解決にあたったことである。アルベルスの丘で、リアンノンの馬を止めて話をし、彼女の用向きを知ることができたのも、プウイス自身が、行動をおこしてからのことであった。宮廷の家来たちに命じて、彼女と話をしようとしたときには、リアンノンの馬に追いつくことさえ、出来なかったからである。この例にならって、スイッツも自分で見張りに立ち、敵と死力を尽くして戦い、彼を降伏させることによって、自分の国を悩ましていた災難を、見事に追い払ったのであった。大将が率先して戦うことによって、勝敗を決するというのが、ケルト世界に共通する、争いの決着のつけ方だったのである。

スイッツが、見張りを続けてから、三日目の晩に、まふまふと盗人の男を捕まえるというパターンは、「四つの物語」の第三話、「スィールの息子マナウィダン」(‘Manawydan Uab Llyr’) 中で、主人公スィールが、イングランドの地から持ち帰った麦の種を蒔いて収穫をする、三日目の晩の出来事であったのと同じであることが分かる。また、事件の起こる夜が、毎年決まって、五月祭の宵のことだったというのは、第一話「プウイス物語」で、テイルノン(Teirnon)が、若

者ブレデリ(Pryderi)を見つけることになる晩、すなわち毎年生まれたばかりの子馬が忽然と姿を消してしまうという晩が、五月祭の宵だったというのと重なってくるのである。ケルトの暦によると、この五月一日は、人々が待ち兼ねた夏が始まる日となっていた。お祭りは、その前の晩、すなわち四月三十日から始められ、前述のように、その夜は、冬の宵の時と同様に幽霊たちが自由に歩き回る、日常の中に非日常性が入り込むことを許された、精霊たちの活躍する夜と考えられていたのである。また田園には精霊たちが寄り集い、様々な前兆が起こって、未来の出来事を指し示す晩であるとも言われていた。一九世紀の中頃まで、実際に大かがり火が焚かれ、各地で盛大に祝われていた祭りであったのである。したがって、この夜には、全ての異常な出来事が起こる可能性があるということは、人々に共通した認識であった。まさにこの夜こそが、しばしのあいだ日常性から解放され、自由な空想を多少の戦慄とともに味わう、ケルトの人々の「お話の夜」であったと言えるのである。

二匹の竜がしこたま食らい、すっかり酔い潰れてしまう原因となるのが、蜂蜜酒である。これは、一八世紀に大麦から作られるエール酒がその代わりをするようになるまで、ケルトの社会で、最も人気のある酒であった。蜂蜜、ホップ、イースト菌、そして水を混ぜて作られる飲物であったと言う。この物語ばかりでなく、六世紀の詩人アネイリン(Aneirin)の「ゴドズイン」(‘Y Gododdin’) の中にも、ウェールズ社会に伝統的な、戦士とその主人の親密な関係を表す語句、‘talu medd’ (「蜂蜜酒に値する」) という表現となつて、早くも登場してくる酒である。

セヴェレスの適切な助言と協力を受けて、スイッツは、ブリテン島に降りかかってきた三つの災難を、見事に振り払うことが出来た。インド・ヨーロッパ世界に共通の、一つの社会を保持してゆく三つの重要な観念形態——宗主権(‘sovereignty’) と力(‘force’) と豊穡(‘fecundity’) が、このようにして、再びブリテンの国に戻ってきたのであ

る。それはまた、二人の兄弟の、知恵(セヴェレス)と力(スイッズ)の協力が生んだ賜物、麗しい兄弟愛の共同作業の結果として復活した平和であったとも言えよう。

III

スノードンのディナス・エムリスに幽閉されている竜たちの存在は、このような空想的な物語の中に登場する最も奇妙な伝説の一つである。後になって起る、彼らの戦いの結果として、名高い魔法使いマーリン(Merlin)の発見の話が生まれ、やがては、あの「アーサー王ロマンス」の幕開けへとつながってゆく発端となる、言い伝えであるからである。南ウェールズに生まれた九世紀の歴史家ネンニウスは、彼の著書『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*)の中⁽⁹⁾で、これらの竜について、次のように記述していると言う。

サクソン人が、はじめてブリテン島のケント州に渡来した五世紀頃、ブリテン島はヴォーティガン(Vortigern)王、ウェールズ語名グルセリン(Gwrthryn)が治めていて、北の地方を脅かすピクト人やスコット人と戦っていた。度重なる戦いに手をやいた王は、やがてサクソン人の將軍ヘンギスト(Hengist)やホーサ(Horsa)と協定を結び、これらの北方の侵入者を阻止しようとした。王はまた、ヘンギストの娘に恋をして、彼にケント州を割譲したりして、ブリトン人の議会に糾弾されるようになった。そこで王は、スノードン地方へ逃げ込み、そこに新しい城塞を建造しようとした。しかし、その築城の工事は、土台を造るところで既に暗礁に乗り上げてしまったのだ。昼間おこなった仕事は、夜の間に全て崩壊し、一向に先へ進まなかったからである。相談を受けた宮廷の魔術師たちは、王に、全国に使者を派遣し、父親を持つことなく誕生した男の子を捜し出し、その子供の血を、土台に振り掛けてみるようにと進言した。

使者たちが連れてきた少年の名前は、ラテン語でアンブロシウス(Ambrosius)、ウェールズ語でエメリス・ウレデグ(Emrys Wledig)と呼ば

た。少年は、魔術師たちの主張を否定し、代わりに土台の置かれる予定になっていた土地の下を掘ってみるよう主張した。すると、そこには地下の湖があり、その中で白と赤の二匹の竜が眠っているのが発見された。夜になると、これらの眠りを防げられた竜たちが、激しく戦うために、昼間造り上げた土台も、すっかり壊されてしまうことになったのだ。少年はまた、戦いでは、最初は白い竜が勝っているが、やがて赤い竜が優勢となり、最後には白い竜を倒してしまうだろうと予言する。少年の説明によると、白い竜はブリテン島に侵入したサクソン人を、また赤い竜はこの島の元来の住人であるブリトン人を表しているというのであった。このようにして、その少年は、一躍最高の魔法使いとして認められるようになったのである。やがて、ヴォーティガン王がこの地を追われた後、この若い魔法使いは、竜たちが戦ったこの地に、自分の砦を建てた。そのため、ここはディナス・エムリス、すなわち、「エムリスの砦」と呼ばれるようになったのである。

一二世紀の聖職者モンマスのジョフリーの『ブリテン諸王の歴史』は、元々はブリトン人の族長の一人であったアーサーを、国民的英雄の像に作り変え、ブリテン王国の理想の君主にした書物とみなされている。そして、そのアーサー王のイメージづくりに、大きな力を貸すのが、魔法使いの中の魔法使いとされるマーリンなのである。このジョフリーの手によって、ネンニウスの歴史書の中に登場した、少年予言者アンブロシウスは、メルリナス・アンブロシウス(Merlinus Ambrosius)、ウェールズ語のメルズィン・エムリリス(Myrdin Emrys)と一つに結び付けられ、以後このラテン語のメルリナスが、英語読みされて、マーリンとなってゆくからである。したがって、後の「アーサー王物語」の中で大活躍する偉大な魔法使いマーリンの創造は、このジョフリーの筆によっていたと言えるのである。前述のヴォーティガン王へ、二匹の竜の存在を指摘し、最後のブリトン人の勝利の予言をする少年としてマーリンが登場してくるのは、第六巻の終わりの部分でのことである。第七巻は、マーリンの予言を収録した

もので、ここにはブリテン人の間に古くから伝えられていた、ストーンヘンジ (Stonehenge) 建設にまつわるエピソード等、種々の伝説が収められている。また、この中でアーサー王の誕生のいきさつを語り、彼をブリテン王の血統をひく正当な人物と認定したのも、ジョフリーの功績であった。すなわち、彼の書いた『ブリテン諸王の歴史』の中に創造されたマーリンという魔法使いの活躍によって、一族長に過ぎなかったアーサーが、偉大な国民的英雄となり、ブリテン人を統一する理想の君主として、人々の脳裏に刻印されてゆくからである。ジョフリーには、この『歴史』の他にも、「マーリンの生涯」(Vita Merlini) という詩の作品もある。このように、後に中世騎士物語の華として全ヨーロッパに広まってゆく、魔法使いマーリンによるアーサー王誕生の秘話は、全てこれらのジョフリーの著作にあったことは確かなのである。

このようにして、少年の予言の中で、最終的な勝利者になる赤い竜のイメージは、ブリトン人の待望思想と強く結びつき、彼らが戦いときに掲げた軍旗や兜の上に、ブリトン人を象徴する記章として使われてゆく。例えば、最初にこの赤い竜を、兜の飾りとして使用したのは、他ならぬアーサー王自身で、一一五五年のことであったと言う。その後の中世の時代を通じて、この竜の姿は、多くのウェールズの詩人たちによって、自分たちの指導者たちの武勇を表す象徴として歌われ続けられた。例えば、五世紀に活躍したとされる、グイネズ (Gwynedd) の王カドワッソン (Cadwallon) は、赤い竜の印を掲げていたと言われ、彼の武勇がこの赤い竜のイメージと一緒に歌われるといったふうであったのである。そしてまた、アーサー王の父、ウーサー・ペンドラゴン (Uther Pendragon) は、赤い王冠をかぶって、背中合わせに立つ二頭の緑の竜が描かれた黄色の盾を持っていたと言われている。また、一四〇一年の戦いの際、ウェールズの勇者オウエイン・グレンドール (Owain Glyndwr) は、白地に金色の竜の姿が浮き出る軍旗を翻して戦ったと信じられているのである。ウェールズ

出身の祖先をもった最初の王として、イングランドの王位についたヘンリー七世は、ボスワース (Bosworth) の戦いで、緑と白の上に、鮮やかな赤い竜の姿を描いた軍旗を掲げていたとも言われ、自分の盾を支える動物としても、竜を使ったとされている。こうして、一四八五年から一六〇三年に至るチューダー王朝の間、王室の紋章の中に、竜がその姿を留めたのである。しかしながら、既に一八〇七年のウェールズの王室記章に、赤い竜の姿が描かれていたものの、バルドと言われる詩人たちの議会の要請によって、エリザベス女王がそれを公式に認めたのは、実に一九五九年のことであったという事実もある。この王室記章に、「この赤い竜が道を示す」という意味をもつ標語、'Y ddraig goch ddyry gychwyn' という文字が刻まれたのは、一九五三年のことである。現在使われている、尻尾の先に鋭い短剣が付け加わった竜の姿が現れるのは、エリザベス一世の時代からであったと言う。

竜の伝説が数多く伝えられているデイナス・エムリスの地は、ベッズゲラート (Beddgelert) とカペル・クリッグ (Capel Curig) の間、スノードンの谷間にある自然の小高い丘のことである。一二世紀の終わり頃、ギラルダス・カムブレンシス (Giraldus Cambrensis) はこの地のことを、次のように記述している。

スノードン山脈の頂上、この地から北へ流れてゆくコンウェイ川の源から、そう遠く離れていないところに、デイナス・エムリスがある。ここは、アムプロシウスの丘であり、この岩の上に座ってマーリンが、ヴォーティガンへ予言をしたところである。

このように、『マビノギ』の二話の中でも、最も短いこの「スィズとセヴェレスの物語」一つを取ってみても、その物語の成立過程、内容、そして伝えるメッセージにいたるまで、様々な考えが存在していたことが分かるのである。九世紀のネンニウスの言及から始ま

ったこのお話が、一二世紀のジョフリー、そして特にギラルダスの著作等の中に、再三関係記事として登場してくることからも、物語の成立は、一二世紀から一三世紀にかけてであろうと考えられる。それは、ノルマン系フランスのロマンスものの影響が、圧倒的な力をもって、従来のウェールズの物語の存在そのものを、揺るがし始めた時期であった。そしてまた、物語の世界に留まらず、ウェールズの社会全体が、大陸のフランスの勢力下に入ろうとしていた時代の直中で、この極めてウェールズ的な雰囲気と、思いを漂わせた物語の持つ意味の大きさが、改めて思い起こされてくる。

その後、ウェールズという国のたどる歴史を考えると、この物語の伝えるメッセージは、限り無く重いと言えるからである。

注

(1) 本稿は、拙論『「マビノギ」研究 (1)~(7) (山梨英和短期大学、「紀要」第19号—24号、一九八五—九〇年、大妻女子大学、「紀要—文系—」第24号、一九九一年) に続くものである。

(2) 使用テキストは、主として、

ウェールズ語版 J. Gwenogvryn Evans (ed.): *The White Book Mabinogion* (Pwllheli: Private Press, 1907), John Rhys & J. Gwenogvryn Evans (eds.): *The Text of the Mabinogion and Other Welsh Tales from the Red Book of Hergest* (Oxford: Clarendon Press, 1887).

英語版 Gwyn Jones & Thomas Jones (trans.): *The Mabinogion* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1949).

日本語版 水谷宏著『中世騎士物語『マビノギオン』訳注 *Cyfranc Lind a Llenelys* (1)~(5)、シリーズセウエリスの物語 (その1—5)』(金城学院大学「金城学院大学論集」第29号—33号、一九八八—九二年)。

著者 B. Brynley F. Roberts (ed.): *Cyfranc Lludd A Llefelys, Mediaeval and Modern Welsh Series Vol. VII* (The Dublin Institute for Advanced Studies, 1975) 244p.

(3) Rachel Bromwich (ed.): *Triedd Ynys Prydein: The Welsh*

Triads (Cardiff: University of Wales Press, 1978), pp. 84-7.

(4) John Rhys: *Celtic Folklore - Welsh and Manx* (Oxford: Oxford University Press, 1901), Vol. I, pp. 308-9.

(5) Lady Charlotte Guest (ed.): *The Mabinogion* (London: Longman, Brown, Green, and Longmans, 1849), Vol. III, pp. 316-7.

(6) Lady Davies et al. (eds.): *Land of the Red Dragon* (Cardiff: University of Wales Press, 1979), pp. 70-1.

(7) Giraldus Cambrensis: *The Itinerary Through Wales* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1908), Chap. VIII, p. 125.